

桜が満開となりました。心地よい風を感じながら外を歩いておりますと、心も何となく穏やかになるような気が致します。穏やかなところが乱れず生涯過ごせばこれ以上素晴らしいことはないのですが、実際のところ一日に幾度となくころころ乱れ、ねたんだり、怒ったりを繰り返している毎日でございます。親鸞聖人のお言葉に「むみとうほんのう無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず」といわれている通りでございます。

先月の朝日新聞に興味深い記事がありました。《【あの世】を信じている人はどれくらいの割合か。統計数理研究所の調査によると、2013年の国民性調査で20代では45%が「信じる」と答えていた。1958年(昭和33)年にも同じ調査で同様の質問をした。そのときは13%だったから3倍を超える。…》といった記事でした。この統計結果に対し記者は《高度成長が始まる時代から、バブルが散っ

ての低迷期へ。誰もが貧しかった時代には等しくドリームがあった。しかし、時代は移り格差は開いて、若者の希望はかすれがちだ》と述べております。

さて、私自身が20代の時、死後に関してどのように思っていたか…率直に申し上げますと当時は「(まだ死なないから)今は考える必要はない(=他人事)」と切り捨て、とにかく今を自分らしく生きるということにこだわっていたように思えます。では、先程ご紹介しました朝日新聞の調査による20代の45%が信じている【あの世】とはどのような世界でどのような価値観をもっているのか…記事にはありませんでしたが非常に興味あるところです。

一般的には【あの世】は「考えても無駄、死んだらおしまい」という考え方と「たぶんこんな世界なのではなかろうか?」と自分の勝手に想像する考え方と大きく2種類に分かれると思いますが、仏教ではこの両方の考えを『じやくけん邪見』とって自分に執とらわれたところの考えであると指摘され、この執とらわれのころのままでは救われないと聞かされ

ます。

浄土真宗で【あの世】のことを考えるとき「後生の一大事」という蓮如上人のお言葉を思い出します。このお言葉には結論から申し上げますと《あの世のことは阿弥陀様にすべておまかせ》という意味が含まれております。《あの世のことは阿弥陀様にすべておまかせ》…なぜそのようなことがいえるのでしょうか?

親鸞聖人が七高僧方しちこうそうのみ教えを受け継ぎ、たくさんのお書物で教えて下さった中心は《「あの世のことはまかせよ」と告げて下さっている阿弥陀様のお言葉(お呼び声) = “南無”、また「そのお呼び声にすべておまかせします(私)」という、救うものと救われるものが一体となって顕れているところが「南無阿弥陀仏(お名号)」である》ということです。そして《このお名号により「後生の一大事」が今、ここで阿弥陀様の側で解決済みであった》と真実の救いをあきらかに示してくださいました。

このみ教えを多くの方々にとよろこんで参りたいものです。

称名